

私の三高時代（92・5・9）

藤林 益三（昭3・文甲）

今大会のメイン・スピーチは藤林益三氏による「私の三高時代」であった。七〇年、三メートルにおよぶ日記から大正末期から昭和初期に至る激動の時代分（大正十四年～昭和三年）を持参され、説明をされた。配属将校配置令の施行、軍国主義の抬頭、知安維持法の制定、大正天皇の崩御、昭和初めの金融恐慌、銀行の取付け騒ぎ、モラトリアムの施行、東大での新人会と七生社の相克、三・一五事件、左翼に対する弾圧の開始。映画「十戒」よりキリスト教の聖書に親しむようになったこと。日記の表題も「貧しき心」とした。その他三高の入学手続き、入学金、寮費、教科書、寮歌集の値段、テニス、ボート、野球等の対一高戦の記録、代返の話、中寮二番の寮生活の話、モグリ寮生の話。勉強の話等々、当時を知る貴重な時代資料は同窓会にとっても永久に保存が望まれる記録である。度々起る爆笑の裡に、スピーチは終了。

（三高同窓会関東支部会報『神陵』第48号平成4年度関東支部大会報より）

講演というと、せめて一時間か一時間半なければ出来ないんですが、28分でせよと言うんですから、これは無理な注文です。「私の三高時代」という演題でございまして少し調べてみたんです。資料によって調べるのが法律家の癖です。これだけの三高時代の日記があるんです。これが大正14年の日記です。博文館の日記です。これが同じく博文館の大正15年、それから昭和に入りまして、自分で原稿用紙に書いたのが上半年分、製本して「貧しき心」と標記しています。これは聖書から引いた言葉でございまして。そしてこれが昭和2年の後半、原稿用紙に書いたのを綴じたままでございます。それからこれが昭和3年の縦書きのノートで書いたもの、これだけです。これだけのものほども今度話をするのに読めませんでした。自分の書いた日記だってこれだけ沢山ありますと読めません。

私は中学校二年の大正十一年から日記を書き始めまして、今日迄七十年分程の日記がたまっております。書齋のバックに三メートル程並んでおります。随時取り出して見ますと便利でございまして。しかし、これ全部はとでも、少し面白いところを読んでみようと思うんですが、それだけの時間があるかどうか。それからこれを包んで来たこの風呂敷は、創立百年のときの風呂敷で、京都でもらって来たのに包んで来たのです。卒業記念アルバムに二五八八年としてあるのは皇紀ですね。これはクラスのアルバムでございまして。これによってその当時の先生方の名前とか同級生の名前とかを見てみたわけでございます。

ところが、五月一日に毎年やるんですが「昭三会全国大会」というのをやっております。私はほとんど欠かさず、毎年五月一日には行つて、一泊して帰つて来るんですが、今年も行つてまいりました。追々会員が減りまして、ここ一年で八人亡くなつておるといふ世話人の報告でございました。三、四十人は集まつていたんですが、去年は三十人を切り、今年はどうとう十九人になりました。奥さんを連れて来ておりましたのが二人おりましたので、ようやく二十一人でございました。そして二次会なんていう元気が、皆なくなりましてね、四時半頃から始めて七時頃に終ると、みんなもう、そのホテルに泊まる人や家に帰る人で。ホテルは烏丸の京都ホテルでございました。本来の京都ホテルはつぶしてしまひまして、いま新築の基礎工事をやつています。私はそれでもの足りんから烏丸から河原町まで四条通りを歩きました、新京極を経て帰つて寝ましたがね。そういうことで、続けて一杯飲みに行こう、という者がいなくなつたんです。誠に淋しい限りでございます。

私は明治四十年生まれ、一九〇七年でございしますが、この八月になりますと八十五歳。ここには奥田会長が当然私より二年の先輩でございすし、或いはここに二人や三人、私より上級の人がいらっしゃると思ひますが、我々の時代は、戦後の人とは大分違つてございます。

ここへ、持つて来ましたのは、大正十三年版「三高歌集」。これも古くなりまして、ポロポロになつておりますので、補強したのでございます、厚紙を当てて。これを持つてまいりましたが、

最初に言っておきたいことは「琵琶湖周航の歌」の、「赤い椿の森かげに」とこの頃歌われておりますが、あれは間違いで「暗い椿の森かげに」ですね。大体「赤い泊り火、なつかしみ」というのがあるから、「赤い」がふたつも出て来るのは、歌としておかしい。そういう考えを持っておるので、皆さんどうぞ「暗い椿の森かげに」というふうに歌って欲しいのです。

この他に財界評論社の作った分厚い「紅萌ゆる」。それから十年程前に同窓会が作りになった「神陵史」。こつこついうものも披けてみましたが、この三〇分の話では役に立ちません。私が入学したのが大正十四年の四月一日でございます。この大正十四年という年はどういう年であったかと申しますと、岩波の近代日本総合年表というのがございますが、非常に便利な本で分厚いものであります。これで調べて来ました。大正十四年四月十三日に「陸軍現役将校学校配属令」という勅令が出ておるんですね。それで早速、翌月の五月四日に、堀田陸軍中佐が京都師団から着任いたしました。我々は兵式訓練を受けることになったのであります。しかしその当時は、やはり三高の自由がありました。下駄ばきで出る者もおりましてね。それから「ゲートルをつける」と言われますと、私なんか真面目に巻脚絆を、中学校の時分のものをつけましたが、ハンカチをくくったり、タオルをゆわえ付けたりして教練に出ました。それから三高には、当時ラグビーや野球をやった北側のグラウンドの他に南側の、京大の楽友会館の方に向った、テニスコートのあるグラウンドがありましたね。あそこが軍事教練の場所でございます。校外訓練で賀茂の方へ

行くようなときには、あそこで隊伍を組んで、寄宿舎の前を通ると、寄宿舎の中へ逃げ込む連中がおりまして、隊伍を整えた時と、校外訓練に出て行く人間とでは大部減っているんですよ。それでもやっぱり堀田中佐は少し遠慮いたしまして、あまり怒るといふようなことはなかつたように思っております。その事を今年の五月一日にも話し合つたのでございます。ところがその後任には吉村操中佐がやつて来まして、この時分から、少し嚴重になつたように思います。これは、いわゆる天保銭といった陸大出のしるしを付けておつたと思ひます。このアルバムの中に吉村中佐の写真がありましたので思ひ出したのでございます。

それで、我々にとって思想的に一番大事なものは、この四月二十二日に治安維持法が公布されて、五月十二日から施行になつたことでございます。これは天皇制と資本主義制を維持する為に、国體の變革と社會革命を禁止、左翼を制圧する目的の法律であつたのでございましたが、この法律は、非常に悪用されて、三高同窓生でも、これによつて大變いじめられたり、死んだりした人が出来たように思ひます。この悪法が出来たのが、今申しました四月二十二日でございます。ところがその頃四月二十日には、全然話が違ひますが、逓信省が東京、大阪、福岡間の定期航空郵便を、開始したことがあつたのです。我々は日常飛行機に乗ることは、汽車や電車に乗るのも同じように考へておりますが、大正十四年には、定期航空郵便が開始されたということがこの年表に出ておりました。

それから七月五日には、東京のことでございますが、安田講堂が竣工式をやっております。大正十四年の事でございます。それから我々の三高に在学しておりました大正十四年、十五年を経ますと、大正十五年の十二月二十五日が、大正天皇崩御の日でございます。これがもう少し早ければ、学期試験が無くなると期待しておいたら、終った日に亡くなられてる。これは、オジャンになった思い出があります。ところが越えて二月七日でしたが、御大葬が行われる日に、夜十一時でしたが遙拝式があつて、私は出席したことが日記に出ておりました。そして昭和に変わったのですが、昭和元年はたった一週間位でございます。昭和は直ぐに二年になるのでございますが、昭和二年の三月十四日に、これは憶えておられる方がありましようが、片岡直温なほはるという大蔵大臣がおりました、土佐の人でございますが、衆議院の予算総会で東京の渡辺銀行というのが破綻したと言う失言をしたのです。本当だったのか翌日やはり倒産したんです。それが新聞に載ったばかりに、昭和初めの金融恐慌につながった。パニックですね、そういう時代であつたわけでございます。思想と経済に異常な動きのあつた時でございます。その三月十四日に失言がありました。翌日の十五日に東京渡辺銀行とあかぢ貯蓄銀行、銀行にあかぢというのはおかしいんですけど、あかぢ貯蓄銀行というのがあつたんですね。これが休業致しております。それから前後各地に銀行の取り付け騒ぎが起りまして、大騒動になつたのでございます。それからその一週間後の四月二十二日に、緊急勅令というものを当時政府が出すことが出来ましたが、それでモ

ラトリウムと言うものを施行したんです。全国的に債権履行延期するんですね。手形やあらゆる債権の期限を三週間延期する。支払いを延ばされた。これがその四月の頃でございます。それで漸く、その翌々日の、四月二十五日に銀行は業務を再開しております。そういうことでございます。

私は昭和三年の三月末日に、三高を卒業したんでございまして、東大の法科へ入ったのでございます。この三月頃は東大には、今でいうと左翼系の新人会と言うのがございまして、それが右翼系の七生社と、争闘いたしましたして、レンガを投げついたり、石を投げついたりする大騒動が、東大であったのでございます。私はその年の三月十五日に、東大法学部の入学試験を受けておりますが、その日が三・一五事件と云って、共産党の第一次大検挙の日になりました。これは治安維持法に基づくものでございます。恐らく徳田球一は、このおりに捕まったのではないかと思いますが、それから終戦迄入れられていました。三月十五日には、そういう事件がありました。四月十七日になりますと、東京帝大で新人会に解散が命じられたんです。やっぱり左翼は、どうしてもいかにんということでありまして。それから翌昭和四年の四月十六日には、所謂四・一六事件といまして、市川正一とか、鍋山貞親という共産党の幹部その他多勢が検挙されるというような時代であったのです。私はもう三高は出ておりますけれども、それからついでにお話しますと、そのころ河上肇博士が、京都大学経済学部の教授をしておられた。これが昭和三年の四月十八日

に辞職を迫られて、依願免官ということ、辞めておりますね。だからそういう時代でございまして、大変だったんです。

しかし私は余り思想的には動揺しなかった。それはこういうことを申し上げてよいかどうか知りませんが、私は大正十四年の三月、三高の入学試験が終りました日に、新京極で映画を観たんです。セシル・B・デミルという人の作った白黒映画の「十戒」というのでした。「十戒」を見て興味を持ちまして、丸善へ行って聖書を買ったんです。ところがそれが新約聖書であつたわけです。どこにもその十戒のことが書いてないんですね。私は聖書について何も知らなかつた。新約聖書を読んでから秋に旧約聖書を買つたら、それには書いてあるんですね。出エジプト記というのに出ています。それ以来聖書に親しむようになったんです。それが私を思想的に動揺させなかつた原因じゃないかと思ふんでございます。ここにあります昭和二年の上半期の日記の扉に、コレ製本したんですが、ここに「幸いなるかな心の貧しき者 天国はその人のものなり。幸いなるかな悲しむ者 その人はなぐさめられん」と。幸いなるかな心の貧しき者という言葉がありまして、そこで「貧しき心」という日記の表題をつけているんですね。そういうことがあつたから赤い方へも、右の方へも行かなかつたのじゃないかと、今では思つておるんです。この日記を見ますと、非常に面白いんですが皆さんにご紹介することが出来ないのは誠に残念。しかし、三高の入学のうちにそういうことがありました。

当時、高等学校の入学試験問題は、新聞に発表されましたね。それが貼り付けてあるんです。それから、こういう印刷物がありました、「藤林益三、右、本校第一学年文科甲類二入学ヲ許可ス、入学者心得ニヨリ直ニ入学ノ手續ヲナスベシ、四月八日午前八時ヨリ入学式ヲ挙行ス。当日父兄ノ入場ヲ歓迎ス、同九日右同刻ヨリ始業式、式後、各教室ニテ授業申渡シアリ、大正十四年三月三十一日、第三高等学校」：こういう紙が貼ってあるんです。そしてその裏に、紅萌ゆるがペンで書いてあります。こういうものを読んで、たくさん付箋を付けて来ましたけれども、とても皆さんにご紹介するわけにはいけません。読んでお聞かせすると、面白いと思うんですけれども、殊に、三高と一高の対抗戦ですね、八月、太鼓集めの苦勞をして、それから上京したことが書いてありますが、スコアから何から、全部日記に書いてあるんです。

大正十四年夏、七月二十六日に、陸上競技が加茂でありました。これは東京じゃなくて加茂であつたんですね、四十三対四十一で勝っておる。それから八月二十九日〜三十日にテニスがありまして、シングルとダブルスですか、合せて五対四で勝っておる。それから八月三十日は水上有りまして、これは三囲神社^{みわが}辺へ行って応援したことが日記に詳しく書いてある。三艇身半で勝っております。それから八月二十八日は野球です。これは二対一で勝っております。そういうことが克明に書いてあるんです。だから三高のこういうことを調べる人は、私の日記を利用すると良からうと思うくらいです。私は、とにかく、くそ真面目な生徒でございまして、代返頼んで

さぼるといふようなことはなかった。

私の友人で、もう亡くなりました熊谷鳩居堂の熊谷直道君はおとなしい男で、断わることが出来なくて、三人にも四人にも頼まれて、声を変えて返事をしていたけれども、私はその後司法研修所の教官をやってみてね、こんなことはすぐ判りますね。いくらコワ色使ったって、同じ席から声が出るんだもの、そして数が足らないわな、そういうことを思い出しました。

今度日記を読んでみて思い出したんですが、私は入学すると同時に寄宿舎へ入ったんです。寄宿舎へ入って、あの当時、舎監にお金を納めたんですね、それが日記のうしろの出納帳に書いてあるんです。それから沢山買った教科書や、自分で買った英語の本とか、ドイツ語の本とか、皆値段と日を書いてありますから、よくわかるんです。大正十四年の日記です。四月八日、三高の寄宿舎に入り、学資金を百円舎監に預けてるんですな。学資金納入ということですよ。それから出してもらってお金を払うんですよ。冬服代四十五円、教科書が六円、葉書十枚、切手五枚が三十銭、色々面白いんです。それから、ここに持って来た三高歌集、これが四月十日に三十銭です。今、一円落ちていても子供が拾いませんが、その三分の一で冊子が買えたんです。ところが、私は中寮二番に入っただんですが、どうもそこにはもぐりも入ってありません。寄宿舎に舍費も払わぬ奴が、もぐり込んでおりました、これが勉強しないんですよ。遊ぶことを誘惑致しましてね、それから、昨日名簿で調べたら故人になっておりましたが武藤興道という人が室長なんですよ。理

甲の人でした。この男があまり勉強しない、もぐりもおる、それから六〇七人部屋におりましたが、勉強しないで遊んでばかりおる。

私が本を読んでもおると、本を取り上げるんですよ、そして遊びに行こう言うんです。何しに行くんでもない、ただ、ブラブラ歩きに行つて、ダベるだけなんですがね。コリヤかなわんというんで、私は五月一日の記念祭が終ると同時に郷里の園部から通学致しました。そしたら、果たせるかな、私の中寮二番におつた奴は全員落第です。私だけです、ドツペラなかつたのは。やっぱり、汽車通学したり下宿したりして、とにかく勉強した方がよかつた。その当時、ドテカンというあだ名の兎玉という数学の先生がおつたんです。これが非常にむずかしい、おつかない先生でしてね、これに落第させられるんです。

文科の学生は、中学の時に数学の教科書なんかは燃してきたんです。それが高等数学とかいつて、三角ですか何ですか微分、積分ですか、ああいうものをやらされたんですね。こんなモンやるかという気持があつたものですから、宿題を出されて、私も当てられてね、黒板へ行つてどうとも何も書けずでした。「ああ、もう落第してもらいます」とこう言うんですよ。そういう先生には参りましたね。しかし、私は一生懸命勉強は致しまして、英語は盛んに勉強したんです。そして英文学をやるつもりでおつたんですが、私の郷里の先輩に中西信太郎という京大の英文学教授をやつた人がおりましてね、「君のように何でも潰しのきく奴は、こんなアホな勉強はするな、

「英文学なんかやるな」と。この中で英文学やった人がおられたら謝ります。それで英文学を止めて法律という一番平凡な学問をやったわけでありまして。それで今日、ここで立って喋ってるわけです。もう時間がなくなりましたから、これで止めます。

了

(弁護士・元最高裁判所長官)